



今も悠然とくつ儼美な姿を保つ華虹門

Special Features / Engineering's Heritage IV Learn from the wisdom of our predecessors Korea

# 水と敵からの侵攻を防ぐ、華城のシンボル「華虹門」

## 韓国・水原

特集  
土木遺産IV  
先人たちに叡智を学ぶ 韓国

中央復建コンサルタンツ株式会社/鉄道系グループ  
弥勒綾子  
MIROKU Ayako



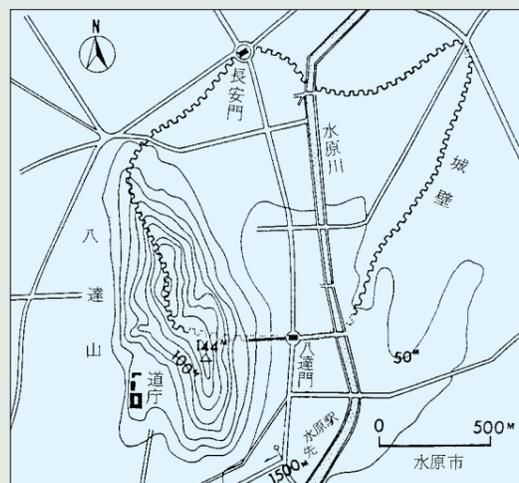
### 1—首都ソウルの奥座敷

華虹門は、韓国の首都ソウル特別市から南方約35kmに位置する京畿道水原市、そこに現存する華城の城壁の中にある石橋である。水原は、李氏朝鮮時代(1392～1910年)の第22代国王・正祖(1752～1800年)により造られた韓国初の計画都市である。中心部の旧市街をぐるりと取り囲む華城は、城壁の全長が5.7kmにも及び、韓国内に現存する城の中で、もっとも原形を留めている大変貴重な文化遺産である。1997年12月には世界遺産に登録された。

華城の城壁は、山城を築造した町の西側にそびえる八達山(144m)の尾根をつたっているため、町は山の東北側の自然の丘陵をそのまま活かした造りとなっている。また、町の南北には光教山から南側に流れる水原川(華城市の黄口池川へと流れる延長14.45kmの河川)が貫通しており、華虹門はその北側の水門としての役割を今も果たしている。

ソウルからそう遠くない地に、なぜ後世に残るほどの

このような立派な都市がつくられたのだろうか。そして、川を中央に配した町のなかで、華虹門はどのような役割を担ってきたのだろうか。



■図1—水原華城の全体図

### 2—父親への思いが契機となった新都市建設

華城の建設は、正祖が政争の犠牲となった父親思悼世子を悼み、王に即位した13年後の1789年に父親の遺骸を揚州から水原の南の華山に移したことが契機となる。米びつに閉じ込められ死を遂げた父親の悲運、その魂を慰めたいという強い思いからこの地に遺骸を改葬したという。

実際に城壁の建設に取りかかったのはその4年後である。しかし、遺骸をこの地に改葬した時点で、正祖が都市の建設と遷都を念頭においていたであろうことは、朝鮮王朝の歴史をみれば優に想像できる。

近世朝鮮国時代は、1392年に高麗王朝に変わって李氏が王位についた時から始まり、その後約500年の歴史を刻んだ。高麗時代から大きく変わったことは、国教を仏教にかわり儒教としたことや、第4代・世宗が訓民正音(ハングル文字)を作ったことなどであり、まさに、近代の韓国の礎を築いたともいえる。しかし、16～17世紀前半にかけて、日本、満州などによる度重なる侵入を受け、朝鮮国にとっては苦難の時代が続いた。前代である第21代・英祖が、荒廃した国家・国土を建て直し富国殖産に勤めたという流れをくみ、おそらく正祖には、さらなる国の発展を願う気持ちが強くあったに違いない。そのため、侵攻に十分に耐え得る防御力の高い新都市の建設によって王権をより確かなものにすることが必要不可欠だったのだろう。

### 3—官、民、軍が共に暮らす邑城

華城の建設は、実学を究めた若い学者、丁若鏞と37万人の民衆によってなされた。丁若鏞は王室書庫の書籍をくまなく調べ、新しい城郭の設計に中国と日本の城制の長所をも取り入れた。また、城壁の材料となる石を

運ぶための挙重機を考案するなど工事手法に工夫をした。さらに成果給制によって人手を管理し、可能な限り工期の短縮に努めた結果、2年10ヶ月後の1796年に城壁を完成させた。工事の一部始終は『華城城役儀軌』にまとめられ、ほぼ完璧で膨大な工事記録報告書が現存している。

華城は町の西側にある八達山に城を構え、山の東北側は自然の丘陵をそのまま残した平山城である。これは、ソウルや平壤などと同じ、自然の地形をそのまま利用した韓国特有の城制である。しかし、特筆すべきは、華城は門楼・水門・橋梁・池などの都市基盤施設を完備し、城壁の中に町全体を取り込んだ邑城の形式をとっていることである。

正祖は1793年から本格的に華城新都市の建設を開始した。しかし、その以前から新都市建設の準備をすすめており、特に都市基盤施設の拡充に力を入れていた。1794年冬からは北城の外の土地を開墾し、貯水池を次々と掘り、屯田を数多く建設した。このことから農業の振興をはかり、より強固な国づくりを目指したいという正祖の意気込みが感じられる。

### 4—石の調達に苦心した「華虹門」

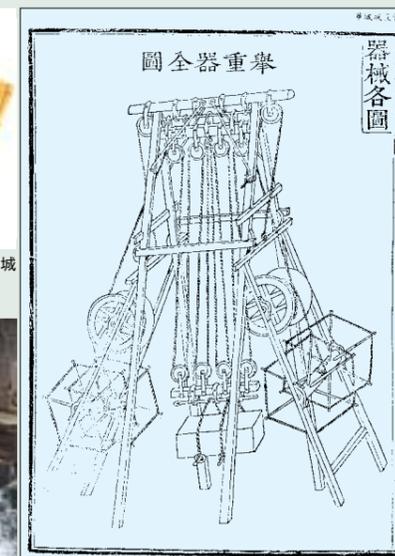
華虹門の橋長は約30m、幅員は5mほどである。石橋の上には、縦約10m、横約4m、高さ約7mの大きさの楼閣がある。石橋のアーチ構造は、過去の調査隊の資料によると、7連のうち中央のアーチ4連が幅2.8m、高さ2.6m、左右のアーチ3連が幅2.5m、高さ2.4mで、中央は左右のアーチより若干大きくなっている。この形式は多連アーチではよく見られる形で、洪水期の流水に配慮しているためと思われる。アーチリングの石積みは「拱圈石縦連法」と呼ばれる工法で、19世紀に日本国内で建設



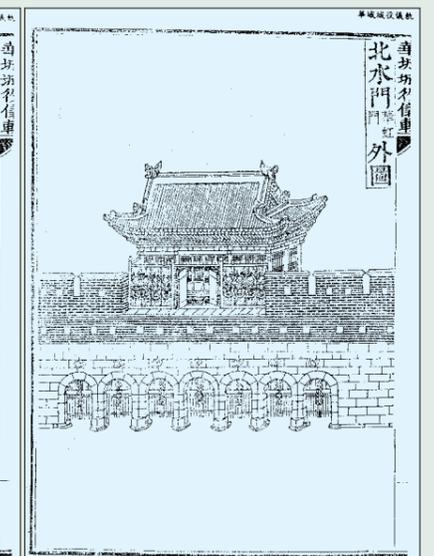
■写真1—華城を築造する際の一切の事柄を記録した「華城城役儀軌」



■写真2—45°の勾配がつけられた河底



■図2—石の運搬用に丁若鏞が考案した挙重機



■図3—華虹門の7連アーチ



■写真3—上流側の五角形をした礎石

された数多くのアーチ橋と同じである。また、下流側の川底は、水流をおさえる目的で石積みに45°の勾配をつけている。

華虹門(北水門)のアーチは、城壁の大部分がそうであるように花崗岩を積んで作られている。一方、1922年7月の大洪水で流失された後、今まで復元されていない南水門は、ほぼ同じ構造でありながら煉瓦を積んで作られている。このことから北水門は、南水門に比べて優位な位置付けがされていたことがわかる。ちなみに華虹門を含め城壁全体の建設に使われた花崗岩は、八達山や近郊の宿智山などの主に三箇所から、大小含め187,600個が調達された。また、ソウルから水原への途上には、王家が通るための「大皇橋」など数多くの石橋が建設された。これらの橋も含め、いくら石の文化を持つ韓国といえども、当時これほどまで大量の石の調達には苦心したに違いない。

#### 5—水、そして敵からの侵攻を防ぐ

水原川の川幅は25mほどであり、現在の流量はかなり少なくなっている。しかし、1922年の大洪水で華虹門の一部が破損し、1932年5月に復旧されて現在に至るなど、過去にはもっと流量の多い時期があったと考えられる。このことは、上流側(城外側)のアーチ礎石が、



■写真4—水門の上に積まれた身を守るための城壁と遠銃眼

流水に配慮し五角形で作られていることからわかる。

一方で、城壁建設の最大の目的である「敵からの侵攻を防ぐ」という役目は、華虹門にも組み込まれている。楼閣の左右には、「女牆」という敵の銃弾や矢から体を保護するために低く積んだ城壁がある。女牆の一つを「堞」と表記し、堞と堞の隙間を堞口と呼ぶ。この隙間を通して敵を監視し銃や矢を放った。また、遠方まで銃を撃つためには、堞の中にある「遠銃眼」を用いた。敵の侵入という面からみて、ともすると弱点にもなりかねない石橋においても、万全の構えをとっていた当時の様子が想像できる。

華城には、このほかにも町を侵攻から防ぐための様々な工夫がなされている。城の内外の出入りに用い



■写真5—見づらい場所に作られた暗門



■写真6—夜になると光る壁の十文字模様



■写真7—城内側の緩やかな土手



■写真8—楼閣から上流側の風景を眺める



■写真9—華虹門上流側の風光明媚な情景

る「暗門」は、城外の敵から見えにくい位置に合計5箇所作られている。楼閣の壁には、砂・黄土・石灰を混ぜている十文字模様があり、夜になると光る仕組みになっている。また、城壁の内側は緩やかな土手となっていて、急な敵の来襲があったときはどこからでも兵士が土手を上がって守備位置につけるような工夫がなされている。

#### 6—韓国唯一の楼下水門

華虹門は韓国唯一の楼下水門である。水門の役割を果たすのはもちろんのこと、その景色の美しさでも有名である。7連のアーチの上の橋面には楼閣(華虹門)がある。楼閣に登ると、城壁の外側となる北側には龍池、城壁の内側となる南側には水原川の清流や川辺の落ち着いた景色を眺めることができる。そのため今も人々が集う場となっている。門楼は、前面に柱4個、側面に柱3個からなり、外側には鬼面が描かれている。

1793年に正祖が水原から華城という地名に変えた頃から、水原周辺の八つの美しい景色を選び鑑賞しあう習慣ができた。華虹門の東隣りには「訪花随柳亭」という角楼があり、そこから見える華虹門とあわせて一帯の景観は大変素晴らしく、水原八景に選ばれている。「華虹観漲(華虹門の滝の噴水があふれる光景)」「竜池待月(訪花随柳亭の横の竜淵からの月見)」「南堤長柳(水原川に沿って並んでいる柳の木)」と、実に八景のうちの三景が華虹門の周辺にあり、華虹門が華城の景観において重要な役割を担っているかがうかがえる。さらに訪花随柳亭に登ると、「八建晴嵐(霞が囲み神秘的な八建山)」「光教積雪(白い雪がかかった光教山の杜観さ)」も加わり五景を感じることができる。

華城を建設するにあたり、ともすると弱点ともなりがちな水門をなぜ北側の中央に配したのであろうか。その明確な答えはないが、水原川と華虹門の持つ優美さは、忠実に現代に伝えられている。

#### 7—見果てぬ夢を残して

正祖が目的とした遷都は、正祖が死去したことによって中断され、結局実現することはなかった。

しかし、華城は今も水原の町に悠然とそびえたち、その北側に控える華虹門は人々の往来と町のシンボルとしての役割を十分に果たし続けている。今もなお世界中の多くの人々がこの地を訪れるため、水原では毎年多くの伝統・文化行事が開催される。華虹門は、敵の侵攻を防ぐ必要のなくなった今日もなお、人々の架け橋として変わらずそこにありつづけるのである。

#### <参考文献>

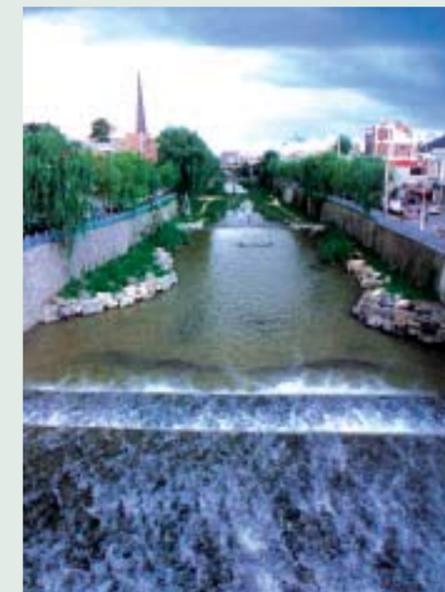
- 1)「華城のみちるべ」2004(社)華城研究会
- 2)「華城」2002(社)華城研究会
- 3)「華城城役儀軌」(社)華城研究会
- 4)「土木施工「続 韓国の伝統的な古い石橋を訪ねて」」2001.2 内藤禎二著 山海堂
- 5)「韓国水原城」 渋谷興平著 日本東アジア文化財交流会

#### <取材協力・資料提供>

- 1) 社団法人 華城研究会

#### (写真提供:P10上、上野淳人)

- 図1、参考文献5より
- 図2、3、参考文献3より
- 写真1、3、4、参考文献1より
- 写真2、5、6、中村和也
- 写真7、8、著者
- 写真9、10、参考文献2より)



■写真10—城内を流れる水原川沿いに並ぶ柳の木